

「手塚誌」の発刊によせて

手塚自治会長 滝澤章一



満々と溢れんばかりの水を湛え、どっかりと中央に鎮座する舌喰池。東に裾ながき浅間山の遠望を眺め、南に名峰「独鉦山」に抱かれた平穏な里「てづか」。豊かな自然環境に恵まれたこの手塚の昔を、その歴史を探求し、そこに生活した人々の生き様を浮き彫りにする。それを今後の手塚を引き継ぐ子孫のために、記録に残すということは誠に意義のあることであります。今ここに貴重な一冊を皆さんのお手元にお届けできますことは、この上ない慶びに堪えません。

大正十一年に編纂された「手塚誌」の時代から九十数年、激動の二十世紀といわれ、米作・養蚕など農業中心の生活環境から、戦後の復興期、高度経済成長期を経て、道路網の整備・車社会・高齢化世帯の増加など大きく変貌した昭和から現在までの状況と、宝蔵庫整備完了を機に、平成十一年一月の新年総会において手塚誌の作成について提案されました。その後、手塚誌刊行準備委員会を経て、翌年二月手塚誌編纂委員の皆様が選任されました。

以来、編纂作業に取り組まれた委員の皆様、本当にご苦勞様でした。心から感謝と敬意を表するものであります。みなさまの献身的な努力と粘り強さが、資料収集をはじめ、史実を検証して記述する熱い思いとしてここに結実いたしました。また、今年度「わがまち魅力アップ応援事業」の採択により、一段と編纂作業に拍車がかかったものと思います。

この編纂にあたりまして、多くの皆様から昔の貴重な経歴話や、家に伝えられている資料及び、写真などの情報をお寄せいただきましたこと、厚く御礼を申し上げます。

手塚の歴史を熱く語られる曲尾勝先生をはじめ、この地に住むことを誇りに思う皆さんと共に、この手塚がいつまでも希望にあふれ、安全・安心で心の通い合うのどかな里でありますよう祈念して、発刊にあたっての挨拶といたします。

平成二十五年五月吉日

「手塚誌」の編纂を終えて

手塚誌編纂委員長 曲尾勝



手塚の里の生いたちは、落人の集りでもできたのではなく、殿様によってつくられたムラでもなく、昔から住むのに都合がよかった地形などから、古代人が早くから住みついでできたムラだと考えられています。産川の最上流に位置して水便が良い、山が近くて獲物をとるのに都合が良い、耕作するのに広い平地を持っている、つまり「水・山・耕地」の三拍子が揃っていることや、早くからアイヌ族が住んでいたのでは？と考えさせられる「シツカブ」という地名のところが竜坂道を上りつめた野倉とのムラ

境にあり、アイヌ語で「網干し場」という意だといわれアイヌ族が住んでいたのではないかとわれています。手塚の集落には「樋ノ口」「堰口」の地名があります。川から水を揚げた昔の用語に「樋」があり「堰」があり、正しく産川の揚げ口に「樋ノ口」と「堰口」があります。この辺りから人が住みついたものと思われる。

やがて住民が増え集落が出来て、地名「手塚村」が生まれたのですがこの地名「手塚村」が日本全国で唯一の地名で、他には見当たらない珍しい地名だといわれています。しかし起源などははっきりしていません。「文治三年（一一八六）一月八日 惟宗忠久（島津）鎌倉殿から塩田庄の地頭に任じられる」（上田市誌年表）唐突ですが八二〇年もの昔「手塚」を含めた塩田庄が何故中央の権力者に注目され、支配をうけることになったのでしょうか。その頃この地では木曾義仲が挙兵し、手塚太郎金刺光盛も呼応して参戦したり、唐・万寿姫の鎌倉での物語・伝説があり、平家が破れ、源頼朝の時代になりつつある時でした。それから時を経て建治三年（一一七七）五月二十二日北条義政が出家して鎌倉を出奔し、塩田庄にこもり、塩田北条三代（一一七七〜一三三三）に亘ってこの地に館を構えて塩田を治めたため、「信州の鎌倉」の名が全国に知られるところとなりました。

その塩田庄をささえたのが「手塚田つば」なのです。その証となるのが寛政三年（一七九一）の塩田組二二か村の納仕高で手塚村が一番の多額納税地になっていることです。手塚あつての「信州の鎌倉」であると誇りにしても良いかと思えます。

平成版「手塚誌」とも云える今度の手塚誌には明治十五年と大正十一年に編纂された「手塚誌」がほぼ全文掲載されています。こ